

Feeling excited

Dance with Heart  
The Kikunokai Troupe  
We are burning with enthusiasm  
in creating national art for the new era.

Chairperson Michiyo Hata  
Chief Editor Misuzu Takahashi

# 日本のおどり

発行：舞踊集団 菊の会  
〒161-0031  
東京都新宿区西落合2-21-23  
TEL 03-5983-6001 (代表)  
京都八瀬研修所  
〒601-1254  
京都市左京区八瀬野瀬町10  
TEL 075-712-8701 (代表)  
http://www.kikunokai.co.jp/

Dancing from the heart

【随想】

## 舞扇

maiongi



Photo Hiroshi Mizobuchi

私が畑先生と出会ったのは、八歳の誕生日を迎えようとしていた頃で、初めて触れた日本舞踊の世界はとても衝撃的なものでした。そこは美しく華やかで、まるで夢の世界に足を踏み入れてしまったかのように心がときめいたことを、今でもはつきりと覚えていています。

私が先生の元で、初めてお花を生けさせて頂いた時の事です。私は応接間に大きな花瓶を置き、溢れるほどのお花を生けてみました。どのくらい、お花と向き合っていたことでしょうか。悪戦苦闘の末に、どうにか自分なりに納得のいくものに仕上がりました。

お花を生けて具合の悪くなる人も珍しいと思うのですが、肩は凝りクタクタに疲れてしまいました。そこに、先生がお見えになったのです。先生は私の生けた精一杯の作品に温かい眼差しを向け、一言「少し大胆だけど、良いと思いますよ」と言ってお下さったのです。大感動でした。先生の温かなお心に触れて、それまでの疲れなど一気に吹き飛ばしてしまいました。私の生涯の中で、もっとも大切な思い出となっています。

そのとき先生に、「お花を生ける事は舞台作りと同じなのよ。色も違い形も違う、それぞれの個性を存分に生かす切りの事、一つの作品が完成するの。すべてが、舞踊の世界と繋がっているのよ」と奥の深い舞踊の世界を教えて頂きました。

花を生ける心。舞う心。芸術の世界は心の世界です。

「心こそ大切なれ」我が心のときめきを大切に育てながら、その心を磨きゆくことに、一生懸命であり続けたいと思っています。

皆様におかれましては新しい世紀の開幕を迎え、益々健康にお過ごしのことと存じます。昨年の歌舞劇「追分の女」では大変にお世話になりました。誠にありがとうございます。

新しい世紀には、日本舞踊の世界も大きく変化をとげ、世界を舞台に羽ばたいて行く時代になると確信しています。日本人の心、日本の美をひたひたと伝え、舞台活動を通して心の対話をつづけ、吸収し、総てのものに理解を深め、楽しんで行きたいと思っています。

「追分の女」の主人公・花山美也は、大正時代を謙虚につつましく、おおらかに、そして人生の岐路を強く生きて行きます。美也のせりふの中で「私たちの歩く人生の道って一本道じゃないわね。途中で必ず右へ行くか左へかって迷う二股道にぶつかるわ。その道を追分って呼ぶそうだけど、その追分をどっちに取るか、誰もが迷い悩みなが最後は自分が決めて前に進む。結果が良くても悪くても自分が選んだ道だもの納得できるじゃない？」と語ります。

やがて、昔の恋人が現れて美也に求婚しますが、苦しみ悩んだ末に江差にとどまる道を選びます。芯の強さの中にも悲痛な美也の心を感じ、男は「住む処は違っても、生涯の友が波に励ましの便りを毎日託して届けていると思っして下さい」と語りかけます。

繁栄から衰退の辛酸を味わった江差の人々が「江差追分」の歌一つで立ち上がった奥の深さを、三隅治雄先生が見事にお書き下さいました。

公演をご覧くださり、感想をお寄せ頂いた声の中に、美也の女性としての生き方への感動や共感をたくさん頂戴し大変嬉しく思いました。美也の生き方を通して、あらためて人は賢く生きてこそ人間なんだと学ばせて頂きました。新しい世紀の追分を力強く越えて行きたいと念願しています。

## 「追分の女」の人生に想う

歌舞劇

舞踊集団 菊の会  
代表 畑道代



## 「感動的な菊の会の学校公演」

特別寄稿

朝霞市立朝霞第二中学校  
教頭 斉藤 祥子

菊の会との出会いは、7年前の志木公演でした。普通の日本舞踊だと思って出かけた私は、想像を超えた舞台の素晴らしさに一度で魅せられてしまいました。日本の古い民族芸能を題材にした舞台は見事なまでに美しく、力強く、スピード感に溢れていました。

以来、「この素晴らしい舞台を自分だけで見るのは惜しい、是非一度中学生たちに見せたい」と、機会あるごとに教員仲間呼びかけました。

3年前、念願がかない、F中学校での学校公演が実現する事になりました。笛太鼓で登場した獅子舞やひょっとこには驚きと笑いが溢れ、華麗な舞踊の場面では、皆、舞台にくぎづけになって見とれていました。生徒の感想文には「日本にもこんな素晴らしいものがあるとは思わなかった」「いつまでも日本の伝統を広めて行ってほしい」等と書かれ、全員がこの学校公演に酔いしれました。

中学生という多感な時期に「菊の会」の舞台を見せることができ、こんなにも嬉しいことはありませんでした。子供たちには、日本の古き良き伝統を理解し、感性豊かに広く国際社会を見つめられるように育ててほしいと願っております。

そして、私自身は、日本の伝統を大切にする仲間を増やしていきたいと思っています。これからも、菊の会の皆さんが全国の子供たちに、日本の伝統芸能を披露して下さいことを心から願っています。新しい世紀に向かい、菊の会のますますのご発展をお祈り申し上げます。

## Kikunokai News 「千葉県さかえ文化ホールに千人を超える観客」

千葉県文化振興財団と菊の会共催地域文化公演「日本のおどり」が、昨年10月16日、印旛郡栄町の『ふれあいプラザさかえ文化ホール』で開催された。一回公演ながら千名を超える観客を得、初めて見る菊の会の公演に惜しめない拍手が送られた。

### 編集後記

「菊の会だより」が「日本のおどり」にリニューアルして1年が経った。何度も編集会議を持ち、皆の智慧を出し合って何とか2000年号の発行までこぎつけることができた。気がつくときから眩しいほど美しい朝の光が差し込んでいたことも度々あった。人の目に触れる事の少ない地味な仕事。だが新世紀は、人知れない努力がますます輝く時代となると思う。(H)

茶房舞む welcome  
1900年代は、大勢の皆様にお越しいただき、本当にありがとうございました。2000年になりましたが、皆様へ愛され続ける舞むでありますよう努めて参りますので、お引き立ての程をよろしく願ひ申し上げます。

【問い合わせ】  
学校公演、広告等についてのお問い合わせは  
03-5983-6001 (代)  
菊の会「企画部」まで

Editor : Hiroshi Wada/Satoshi Hara/Sachiko Tsuruoka  
Yumiko Nagai  
Design : Nagamitsu Satake  
編集協力: CLIP/HMS

## TOPICS

## 慶熙大学「韓国の伝統芸能の祭典」に菊の会を招聘

昨年10月11日、韓国の慶熙大学の講堂「平和の殿堂」落成記念式典が行われ、落成を祝し「韓国伝統芸能の祭典」が開催された。祭典には慶熙大学からの招聘を受けた菊の会が、「石橋」「藤娘」などを披露。フィナーレの「人間革命」では舞台と観客が一体となり、会場は大きな感動に包まれた。9月の韓国での日本文化解禁から間もなく披露された菊の会の舞踊。韓日の友好の新時代に記念すべき公演となった。



## Kikunokai News 「カッチャ行かねかこの道を」



3年ぶりに「カッチャ行かねかこの道を」の公演が「なかのゼロ小ホール」と菊の会「八瀬研修所」において開催された。公演のために、毎回大きな感動を呼んでいる作品だが、今回は小舞台用に再構成されたため臨場感豊かな舞台が実現し、会場により新鮮な感動を呼び起こしていた。

## 「おふたいむ」ときめく心」

公演メンバー  
中山照子

私が畑先生と出会ったのは、八歳の誕生日を迎えようとしていた頃で、初めて触れた日本舞踊の世界はとても衝撃的なものでした。そこは美しく華やかで、まるで夢の世界に足を踏み入れてしまったかのように心がときめいたことを、今でもはつきりと覚えていています。

私が先生の元で、初めてお花を生けさせて頂いた時の事です。私は応接間に大きな花瓶を置き、溢れるほどのお花を生けてみました。どのくらい、お花と向き合っていたことでしょうか。悪戦苦闘の末に、どうにか自分なりに納得のいくものに仕上がりました。

お花を生けて具合の悪くなる人も珍しいと思うのですが、肩は凝りクタクタに疲れてしまいました。そこに、先生がお見えになったのです。先生は私の生けた精一杯の作品に温かい眼差しを向け、一言「少し大胆だけど、良いと思いますよ」と言ってお下さったのです。大感動でした。先生の温かなお心に触れて、それまでの疲れなど一気に吹き飛ばしてしまいました。私の生涯の中で、もっとも大切な思い出となっています。

そのとき先生に、「お花を生ける事は舞台作りと同じなのよ。色も違い形も違う、それぞれの個性を存分に生かす切りの事、一つの作品が完成するの。すべてが、舞踊の世界と繋がっているのよ」と奥の深い舞踊の世界を教えて頂きました。

花を生ける心。舞う心。芸術の世界は心の世界です。

「心こそ大切なれ」我が心のときめきを大切に育てながら、その心を磨きゆくことに、一生懸命であり続けたいと思っています。



プロフィール  
なかやま てるこ  
1974年畑道代に師事。  
菊の会の作品および数々の海外公演に出演。  
黒澤 明監督映画「夢」の舞踊シーンを畑道代の助手として指導、出演。  
1999年に東京新聞舞踊コンクールに「菊」で2位に入賞  
菊の会京都八瀬研修所在住

プロフィール  
樹木医・塚本こなみさん  
Konami Tukamoto  
日本で初めての女性樹木医。世界最大の藤の移動に世界で始めて成功する。  
現在、栃木県の足利フラワーパーク園長。

塚本こなみさんは女性の樹木医第一号で、沢山の木を移

塚本こなみさんは女性の樹木医第一号で、沢山の木を移

塚本こなみさんは女性の樹木医第一号で、沢山の木を移

塚本こなみさんは女性の樹木医第一号で、沢山の木を移

塚本こなみさんは女性の樹木医第一号で、沢山の木を移

Maimu

舞む対談

Conversation

足利フラワーパーク園長  
塚本こなみ  
舞踊集団 菊の会代表  
畑 道代



栃木県・足利フラワーパークにて撮影をする畑代表。

美しい花の世界と  
共通する下積みの大切さ

畑 昨年は、塚本さんのお

畑 昨年は、塚本さんのお

畑 昨年は、塚本さんのお

畑 昨年は、塚本さんのお

畑 昨年は、塚本さんのお



和やかな雰囲気の中で語り合う  
塚本こなみさんと畑代表（浜松にて）

並べるのはやめよう」とい

畑 でも、それは踊りの世

畑 趣味で舞踊を習ってい



Best scene

哀愁の「江差追分」を踊る畑代表

上、江差追分を切々と唄う木村香澄さん  
下、美也（畑 道代）に長い間の胸の内  
を打ち明ける禮次郎（堀井真吾さん）

追分の女に寄せて

「追分の女」に励まされて —— 芝浦工大名誉教授・笠井尚雄

「追分の女」を志木の公演で拝見しました。一連のストーリーの中で、最初に「追分節」を聞いた時、思わず涙が頬をつたいました。絶妙な節回しと声量、切々と胸に迫る生命の妙音に、忘我の境地で幽玄の世界をさ迷っている有り様でした。

菊の会公演「追分の女」を見て —— 聖徳大学教授・松下俱子

この度、歌舞劇「追分の女」を観賞する機会を得た事に感謝します。まず、幕開けの踊り「にしん大漁」に圧倒されました。力強いきびきびした踊り、踊っている方々の自信に満ちた表情がそのもとになっていたと思います。

歌舞劇というものを殆どはじめて見ましたが、セリフに示されていない登場人物の思いが踊りの中に込められていて、素晴らしいと思いました。今回の舞台を、授業の一環として観賞した学生に、感想をレポートにして提出してもらいました。

文化を伝承する心に拍手 —— 聖徳大学 学生・藤沢郁美

劇の中のストーリーに応じた舞踊の生かし方や工夫に驚きを感じました。力強いエネルギーが随所に表現されており、劇そのものにインパクトを与えていたように思います。

人間本来の生き方を問うというストーリーの視点は、日常を慌ただしい生活の中に流されている私にとって、ハッとさせられるものを感じました。古典と洋風をうまくアレンジした衣装にも感心させられました。守り続ける文化と社会の変化にも、多様にに応じていく必要性を劇や衣装、演出の中に感じました。

文化を守り、伝承されている方々に拍手と感謝の心を送りたいと思います。ありがとうございました。（課題レポート要約）



「追分の女」のラストの群舞

感動の拍手に包まれた  
一九〇〇年代のファイナーレを  
飾った歌舞劇『追分の女』

一九九九年十二月を飾った歌舞劇『追分の女』の公演が十二月二日のサンシティ越谷を皮切りに七会場で行われた。毎年の公演を楽しみにして下さる菊の会のファンを始め、多くの新しい観客を迎え盛大に行われた。

桐の小箱  
kiri no kobako

4

追分&追分節

追分とは浅間山（長野県と群馬県にまたがる）往來の宿場に当たる北国街道と中山道との分岐点を追分とよんだ、その地名から出たもので、ここを馬で通る馬

り、松前、江差の追分節と なったといわれている。歌詞には「浅間山では、わしやなけれど胸に煙が絶えやせぬ」「忍路（おしよる）高島及びもないがせめて歌棄つ磯谷まで」「蝦夷や松前やらずの雨が七日七夜も降ればよい」「花の松前紅葉の江差、開く函館菊の紋」。